社説

いつか来た道 通る道

3・11から13年

元日に能登半島を襲った地震から4日後の深夜。長野市生活環境課の係長、梨本正彦さん(42)は12時間をかけ、ようやく石川県珠洲市に到着しました。その日朝、長野市役所を出発し、単身、大渋滞が続く半島の先端を車で目指したのでした。

災害ごみスペシャリスト

環境省・災害廃棄物処理支援員制度（人材バンク）に名を連ねる災害ごみ処理のスペシャリストとして、被災地の状況を把握するためです。翌早朝から多くの家屋が倒壊する市内＝写真、梨本さん提供＝を回りました。道路や通信は寸断され、水は止まり、トイレは詰まり、ごみ処理施設は復旧の見込みが立たない―。

いったん、長野市に戻り、通常の業務をこなしながら、電話やメールで災害ごみ処理計画の相談に応じました。1月下旬、再び能登半島へ。仮置き場の開設、補助金や起債書類の作成、津波堆積物の処理などを支援するためです。

梨本さんの地元、長野市は2019年の台風で千曲川が氾濫。2千棟以上が全半壊し、がれきや金属くずなどの災害ごみは21万トンに達しました。運動場や公園に仮置き場を設け、再利用したり、市外の施設に最終処分を依頼したり、すべてを片付けるまでに2年強。その経験を通じて災害ごみ問題に精通するようになったのです。

11年の東日本大震災は桁違いでした。災害ごみは実に2千万トン、処理には3年を要しました。その後、16年の熊本地震や、18年の西日本豪雨などを経て、環境省が20年度に創設したのが人材バンクの制度です。災害が年々、頻発化、激甚化する中、被災自治体だけの能力には限界があるからです。

対口支援も東日本から

現時点では24都道県、73市区町村の計254人が人材バンクに登録しています。梨本さんと同じく、皆、何らかの被災を経験した公務員たちです。能登地震でも東北地方や熊本、広島県などから100人近くが被災地に入り、主導的な役割を担っています。

ごみ処理以外にも、避難所の運営や罹災証明書の交付に関し、総務省が18年に創設した「対口支援」という取り組みがあります。大災害が起きれば、直ちに、国が都道府県や政令指定都市を原則1対1で被災自治体に割り当て、復旧復興まで一貫して支えます。

従来は、被災地から具体的な支援の要請が上がってくるのを待って、その都度、応援手段を検討していました。調整に時間を要し刻々と変化する被災地側のニーズに円滑に対応できませんでした。

今回の能登地震でも、東京都や三重県は輪島市、福井県や浜松市は珠洲市、愛知県は志賀町、岐阜県は中能登町と「対口支援」のペアを組むなど、2カ月強が過ぎた今も、常時千人前後の県外職員が被災地を支えています。

「対口」とは中国語で、互いペアを組むという意味。08年の四川大地震で中国政府が採用し、一期の復興に貢献しました。日本は、関西広域連合が東日本大震災時に初めて展開しました。構成する7府県を、発生2日後には東日本3県に割り振り、応援し続けました。名古屋市が「丸ごと支援」と名付けて、福祉や税務、都市計画などの職務ごとにワンセットで職員を岩手県陸前高田市に長期派遣した例もあります。

公務員らしく一歩ずつ

能登地震の復旧復興は緒に就いたばかり。ごみだけを見ても、一千万トンに達し、平時に出るごみの7年分に相当する量です。具体的な処理はこれからの検討です。梨本さ

ニュースを考う

風化とたたかう〈1〉

豊明事件20年 ❶

時計の針 再び動かせたら

加藤 美喜（編集委員）

今からちょうど20年前、愛知県豊明市で発生した「母子4人殺人放火事件」を覚えているだろうか。

こんな聞き方をすること自体、悔しい思いを抱く。平穏な住宅街で小中学生の子ども3人と母親が惨殺された、愛知県警史上でも極めて凶悪な事件の一つだ。若い世代は知らないかもしれない。犯人に結び付く有力な手掛かりがないまま、世の中の記憶が薄れ、コールドケース（長期未解決事件）となってしまった現状に、当時取材をした一人としてもどかしさを感じる。

事件は2004年9月9日未明に起きた。豊明市沓掛町の会社員男性宅に何者かが侵入し、妻の加藤利代さん＝当時(38)、長男佑基さん＝同(15)、長女里奈さん＝同(13)、次男正悟君＝同(9)＝の4人を殺害後、放火して逃走した。夫は残業中で不在で難を逃れた。

当時の県警発表などによれば、利代さんと里奈さんは背中や顔など十数カ所を刺され、それぞれ出血性ショックと外傷性ショックで亡くなった。佑基さんと正悟君は頭部に大きな外傷があり、死因はいずれも脳挫傷とくも膜下出血だった。犯人は4人の就寝中に別々の部屋で殺害し、油をまいて火を付け逃走したとみられるが、凶器や犯人像などは何も分かっていない。

母子4人の遺体が見つかった事件現場＝愛知県豊明市沓掛町で（2004年9月9日、本社ヘリ「あさづる」から）

「なぜ」惨苦続く遺族

事件発生当時、私は入社10年目の社会部記者だった。その前年、思うところあって休職し、米国に留学して犯罪被害者報道を学んだ。帰国後、愛知県警本部担当に配属され、その1カ月後にこの事件が起きた。

同僚記者たちと連日、現場周辺や関係者らの取材に明け暮れた。私は利代さんの実母と実姉を担当した。

当時、県内の利代さんの実家には東京からも多くの報道陣が押しかけていた。いわゆるメディアスクラム状態だった。インターホンの上には、取材は控えてほしい旨の張り紙がしてあったが、その張り紙の上からポタンを押している同業者もいた。いたたまれない光景に出くわしながら、名刺にお悔やみの言葉と短いメッセージを添えてポストに入れた。その後も時間を置いて手紙を書き続けた。

沈黙の日々が長く続き、メディアの姿は徐々に減っていった。数カ月、1年とたつうちに、母と姉は時々、立ち話に応じてくれるようになった。「手紙は読んでいる」「話したいことはある」「でもまだ話せない」というやりとりが続いた。初めて家に上げてもらえたのは事件から約2年がたってからだ。

母は火事の連絡を受けた時、ぼや程度で4人は留守だと思っていた。遺体が出たと聞いて呆然とした後も、気付くと「利代の火の不始末で申し訳ありません」と、娘の嫁ぎ先に頭を下げていた。当時は被害者支援が進んでおらず、警察からの説明も、身を置く場所もなかった。当日午後に近くの商業施設で、放心状態で座り込んでいた時、店のテレビのニュースで「殺人放火事件」と報じられた。失火で逃げ遅れたのではなく「殺されたのだ」と知った。

「なぜ」が渦巻く複雑な心の内を何時間も聞いた。母は自分が身代わりになりたかった、助けてあげられなかったと、自分を責めた。事件当日は正悟君の9歳の誕生日だった。姉は「あの子たちは殺されるために生まれてきたのではない。4人を忘れないでほしい」と、絞り出すように言った。

潜む真実 光当たれ

当時、匿名で取材に応じた姉は、後に天海としさん(61)として街頭に立ち、情報提供を求める活動を続けている。事件から20年、その後も何度も自宅を訪問させていただいた。4人の生きた証しを訴え、犯人逮捕を願う天海さんのひたむきな姿をずっと見てきた。未解決のまま、こんなに長い年月がたつとは誰も思わなかったはずだ。私自身も国内外の転勤を繰り返したが、天海さんの存在はずっと心にあった。昨年秋に会社の異動で再び愛知に戻り、事件の風化防止に資する記事を書きたいと願った。

現在85歳になった母は、街頭に立つことが難しくなっていた。「母が元気なうちに犯人を捕まえてほしい」。天海さんの切実な思いが心に突き刺さる。

未解決事件の遺族は、犯人につながる情報を待ち続けている。当時、何かを見たり知っていたりする人が、まだいるのではないか。天海さんはそう思えてならない。「どんな小さなことでもいいから、情報を寄せてほしい」。その思いが伝わってほしい。

未解決事件があることは、社会にとって不利益だ。犯人が罪を償うことなく、大手を振って生活する。「殺し得」とも言える不正義がまかり通る世の中であっていいのか。時が止まったままの多くの事件がある。遺族を置き去りにせず、一緒に支える社会であってほしい。

豊明事件の発生から20年の今年、改めて事件を振り返り、当時の記憶を呼び起こしたい。風化とたたかうために、社会の知恵を募りたい。時計の針をもう一度動かすべく、私は関係者を訪ね歩いた。

豊明母子4人殺人放火事件の情報提供は、愛知県警愛知署特別捜査本部＝電0561（39）0110（代表）＝へ。

中日新聞を読んで

議会の仕組み

武田 宏子

ニュースを問う

風化とたたかう〈1〉

豊明事件20年 ❷

今なお多くの「謎」残る

加藤 美喜（編集委員）

「なぜ4人は殺されなければならなかったのか」

愛知県豊明市で2004年に起きた母子4人殺人放火事件で、殺害された加藤利代さん＝当時(38)＝の実姉、天海としさん(61)はこの20年、ずっと問い続けている。

先日、私は同市沓掛町の事件現場を訪れた。今は更地となり、事件の情報を募る立て看板があるのみだ。近所の70代女性は「警察が来なくなってもう久しい。話題にも出なくなった」。一方で「火事の様子は今でも鮮明に覚えている。鉄骨がアメのように曲がっていた。奥さんのお姉さん（＝天海さん）は毎年、献花式に来ている。気の毒でならない」と話した。

一帯は市街化調整区域で、同じ名字の表札が並ぶ。地元住民によると、親から土地をもらった次男や三男が建てた新家が多い地区だという。利代さんが嫁いだのも、そんな家だった。

確実に殺害後、放火

事件は04年9月9日に発生。午前4時25分ごろ、火が出ているのを隣人が見つけて119番した。軽量鉄骨2階建て約160平方メートルを全焼し、焼け跡から4人の遺体が見つかった。住んでいたのは5人家族で、夫は残業で不在だった。

次男の小学3年正悟君＝当時(9)＝は1階リビングで、利代さんと、長男の中学3年佑基さん＝同(15)、長女の中学1年里奈さん＝同(13)＝は2階のそれぞれの寝室で見つかった。

殺害された母子4人と愛犬のジャッキー＝天海としさん提供

利代さんと里奈さんは背中や顔などを刃物で多数回、刺されていた。利代さんの傷の一部は肺まで達していた。佑基さんと正悟君は頭部に陥没の痕があり、死因は脳挫傷とくも膜下出血だった。9月9日が誕生日だった正悟君の遺体は最も激しく焼けていた。

玄関と勝手口は施錠されていた。侵入・逃走経路は不明のままだ。犯人の遺留品はなく、凶器も分かっていない。今なお多くの「謎」だけが残る。

動機は何か。なぜこの家族を狙ったのか。元捜査員は「例えば、仮に奥さん（＝利代さん）に恨みがあったとしても、なぜ子どもたちまで全員、殺さないといけないのか」と憤った。

殺害方法が男女で違うのも謎だ。当時の取材を振り返ると、当初は「複数の凶器、複数犯」説が報じられた。母と娘は同じ刃物とみられるが、佑基さんと正悟君の頭の傷はバールなどの鈍器によるとみられていた。しかしその後、兄弟2人の頭の傷は硬い刃物が振り下ろされてできたと考えても矛盾はないとの見方が浮上し「単一凶器、単独犯」説が出た。

犯人からすれば時間と手間がかかるのに、なぜ火を放ったのか。油は家にあったのか、持ち込んだのか。時限発火装置説も報じられた。00年に発生し未解決の東京・世田谷一家殺人事件では、犯人は放火せずに逃走している。別の元捜査員は「豊明事件では、1人ずつ確実に殺害してから火を付けている。なぜそこまでしたのか。犯人の心理が見えない」と話した。

奪われた金品があるのかもはっきりしない。少なくとも県警による事件名は「強盗殺人・放火」ではなく「殺人・放火」のままだ。

正悟君だけが寝室ではなく、1階で見つかった理由も分からない。テレビでサッカーを見ていて寝てしまったという報道もあったが、天海さんは「利代が夜中に正悟を1人にすることは絶対に考えられない。正悟はサッカーに興味はなかった」と話す。

番犬鳴き声聞かれず

飼い犬の「ジャッキー」がほえる声を誰も聞いていないのも、天海さんには不思議だ。ジャッキーは消火活動中に敷地内で、鎖を外された状態で見つかった。用心深い利代さんが番犬として飼い始めた、よくほえるシバイヌだった。ほえなかったのか、ほえたのに聞こえなかったのか。犯人を見ていたかもしれないジャッキーだったが、事件の12年後にこの世を去った。

当日未明、近所の人が女性の悲鳴のような声を聞いている。また、県警は当日に現場の200メートル南東で尾張小牧ナンバーの青っぽい軽自動車の目撃情報があったと発表している。だが、この車と事件の関連は不明だ。

私は県警に犯人像など、事件についての質問を申し入れたが、「捜査中」との返答だった。

残業で1人だけ難を逃れた夫は翌05年、当時の勤務先からパソコンなどをだまし取った詐欺容疑で逮捕、起訴され、執行猶予付きの有罪判決を受けた。弁護側は「無関係の殺人放火事件で取り調べを受けた。別件逮捕で違法捜査だ」と批判した。

犯人は、当日の夫の残業を事前に知っていたのか。それとも夫も殺害するつもりだったのか。生き残った夫は今、何を思うのか、取材を申し込んだが、警察とマスコミへの不信感を強調し「そっとしておいてほしい」と繰り返した。

冤罪は真犯人を逃すことにもつながり、決してあってはならない。この20年で捜査は尽くされたのか。後日、検証したい。

その前に―。天海さんは、4人の生きた証しを伝えることを望んだ。そのために、私は取材を続けた。

豊明母子4人殺人放火事件の情報提供は、愛知県警愛知署特別捜査本部＝電0561（39）0110（代表）＝へ。

社説

強権がロシアをつぶす

週のはじめに考える

ソ連社会には大みそかの定番映画がありました。1970年代半ばに製作された「運命の皮肉」。ソ連国民はテレビでこの映画を見て新年を迎えたものです。

モスクワで暮らす主人公の青年医師は大みそかに友人たちと宴会を開き、正体なく酔いつぶれます。挙げ句に、出張に出かけるはずの友人の代わりに間違って飛行機に乗り、レニングラード（サンクトペテルブルク）へ。酩酊状態のまま主人公が空港から帰宅しようと、タクシー運転手に自宅の住所を告げると、着いた先は造りがまったく同じアパートでした。

ソ連時代は革命や社会主義、共産党にちなんだ住所が用いられ、大抵の都市に「レーニン通り」や「マルクス広場」がありました。主人公の場合も都市は違えど住所は同じでした。

画一的社会は昔も今も

主人公は自宅と同じ番号の部屋のドアを自宅の鍵で開け、自宅と同じ家具が並ぶ部屋で眠り込んでしまいます。一説には、当時のソ連社会にアパートの鍵は数種類しかなかったといわれ、たまたま開いたわけです。

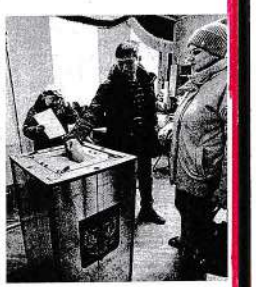
そこへ部屋の主のヒロインが帰宅し、眠りこけている見知らぬ男にびっくり。一緒に新年を迎えようとヒロインの恋人もやって来て、3人の間で修羅場が持ち上がります。

一方、モスクワでは主人公の婚約者が帰りを待ちわびています。行き違いが重なってこの2組のカップルは破局を迎え、4人の運命はひと晩のうちに一変。すったもんだの末に主人公とヒロインが結ばれて大団円を迎えます。

他愛のないラブコメディーですが、画一的なソ連社会への風刺の一面も持ち合わせ、当局の検閲をよく通ったものだと驚きます。

ロシアはプーチン時代に入った2000年代初めに高度成長を達成しました。ロシア史上初めて消費社会が到来し、物質的には豊かになりました。

一方で、言論への締め付けは厳しく、プーチン体制は異論封じに躍起です。国民はウクライナ侵攻に反対の声を上げることは許されません。しかも、プーチン体制に歯向かった者の相次ぐ死は、スターリン時代以来の恐怖支配へ逆戻りしたことを物語っています。



17日に開票される大統領選＝写真、極東・ウラジオストクで、AP＝では、反戦候補の出馬は認められませんでした。プーチン大統領の通算5選は確実。国民の選択肢を奪った上で、政権は「圧勝」を演出してウクライナ侵攻の正当化を図ろうとしています。

プーチン氏は国民の圧倒的多数派が軍事侵攻を支持していると言い張ってますが、積もっていること、2022年秋出した際には抗大し、特に激しダゲスタン共和が拘束されましは昨年、イスラ絡む抗議行動も

3度目ある

中西部バシコではこの年明けへの有罪判決をな抗議デモが起タン人やバシキ数民族は、スラ率がとても高います。

社会の深層でようです。19革命は帝政を倒独裁体制の崩壊着きました。ロほどの間に大衆

中日新聞 [第3種郵便物認可]

ニュースを問う

風化とたたかう〈1〉

豊明事件20年 ③

母子４人の「生きた証し」

加藤 美喜（編集委員）

亡くなった4人の「生きた証し」を伝えたい―。

2004年9月に愛知県豊明市で起きた、未解決の母子4人殺人放火事件で、殺害された加藤利代さん＝当時(38)＝の実姉・天海としさん(61)は、取材や講演会のたびにその思いを訴えてきた。

被害者の存在が脇に追いやられてしまうような事件もある。例えば、1966年に静岡県で一家4人が殺害された事件。袴田巌さん(88)の冤罪と再審公判が注目されるが、殺された両親と子ども2人のことを知る人はどれだけいるだろうか。

家族を愛し日々懸命に

利代さんと、長男の中学3年佑基さん＝同(15)、長女の中学1年里奈さん＝同(13)、次男の小学3年正悟君＝同(9)＝は、それぞれの人生を懸命に生きていた。どんな人となりだったのか。

天海さんによると、利代さんは県内の高校を出て小牧市の会社に就職し、21歳の時に7歳上の夫と職場結婚して、3人の子を産んで育てていた。「おっとりしているけれど、しんの強い妹だった。いつも子どものことが最優先で『子ども命』の母親だった」

子育てをしながら、家計を助けるためにピザ店や競馬場などで、パートで働いた。家事も手を抜かず、誕生日のケーキや節句のお菓子は手作りし、みそも自分で造るなど、まめだったという。夫の帰りが遅い時は夕食で、冷たくなった天ぷらを食べさせたくないと、帰宅を待ってから揚げたてを出した。

利代さんを知る近所の女性は「ピザ店はノルマもあったのか、大変そうだったけれど頑張っていた。明るく優しいお母さんだった」と振り返る。

私は今年、利代さんの生前の映像を初めて見せてもらった。天海さんが焼け跡から見つけて保管していた5本のホームビデオだ。天海さん自身はいまだに、この映像を見ることができずにいる。見るとさまざまな感情があふれて自分をコントロールできなくなると思うからだ。

テープを借りて、利代さんの表情や声に触れた。佑基さんが1歳の時の端午の節句のお祝いや、夫の実家での祖父母らとの餅つきの様子などが収められていた。離乳食を丁寧に食べさせ終わり、抱っこをしながら「すごいたくさん食べたなー」と話す利代さんは、幸せそうだ。私の想像より声は高い。写真でしか知らなかった彼女の生き生きとした姿に感慨が込み上げた。

佑基さんはスポーツが得意で、陸上部の主将だった。野球や格闘技、武道にも興味があり「やんちゃ」な側面もあった。育ち盛りで、人の何倍もご飯を食べた。俳優の上戸彩さんのファンで、特大のポスターと一緒に、はにかんで立つ写真が残っている。事件後に同級生から天海さんに渡されたクラス文集は「リーダーシップがあって、やる気に満ちた人でした」などと、佑基さんの存在の大きさを思う言葉であふれていた。

天海さんは「佑基は15年を一気に駆け抜けるように生きた。やりたいことがたくさんあったはず。死んでも死にきれず、魂がさまよっていたと思う」と悔しさを代弁する。

感謝と責任持ち伝える

里奈さんは中学に入ってから、勉強も部活も頑張っていた。バレーボール部ではセッターで、当時の日本代表の栗原恵さんが憧れだった。利代さんに似ておっとりしつつも、しっかり者の性格で、弟の正悟君の面倒をよく見ていた。ピアノを習い、絵やビーズのアクセサリー作りも楽しんでいた。年頃の女の子らしく、スタイルを気にして「どうすれば脚が細くなるの？」と天海さんに相談してきたこともあった。

天海さんは「まだ13歳。恋もしてほしかった。青春を味わえなくて、かわいそうでならない」と話す。

ぽっちゃりとして甘えん坊だった正悟君は幼稚園の卒園時に、成人した自分宛ての手紙をタイムカプセルに入れていた。「大きくなったら」の欄には「けいさつ」と書かれていた。「怖がりだったのに、警察官になりたかったなんて驚いた」と天海さん。「ウルトラマンとか戦隊ものの『正義のヒーロー』が好きだったから、警察官に憧れたのかな」

手紙にはイラストも添えられていた。幸せだった当時の5人家族を描いたのか、それとも大人になった自分の家庭を想像して表現したのか。天海さんは「将来は自分と同じ、両親と子ども3人の家庭を持つと思って描いたのかも」と話す。

事件報道で匿名を望む被害者や遺族がいる一方で、私は4人を、妻や長男という「記号」ではなく実名で報じることができて、記者として感謝と責任を感じる。訴える力が全く違うと信じるからだ。4人は固有の氏名と夢や希望を持って、確かに生きていた。風化とたたかうために、私たちにできるのは、奪われた命に思いをはせ、その重みを忘れないことだと思う。

天海さん以外にも、4人の生きた証しを心に刻んで日々を送る友人や知人たちがいる。事件で人生が変わった彼らに、私は会いに行った。

加藤利代さん

佑基さん

里奈さん

正悟君

生前の正悟君が描いたイラスト

豊明母子４人殺人放火事件の情報提供は、愛知県警愛知署特別捜査本部＝電0561(39)0110（代表）＝へ。

社説

沈黙の勇者が世界を救う

週のはじめに考える

ウクライナやパレスチナ自治区ガザでは、悲惨な戦争が続いています。武器をとるのは軍人だけではありません。戦時には「普通の人々」も殺人に手を染めます。

今年1月末、東京のドイツ大使館が主催したホロコースト（ユダヤ人大量殺害）追悼行事で、生存者が苦難の体験を語りました。

ハンガリー・ブダペスト出身のヤーノシュ・ツェグレディさん(86)＝写真。1944年3月に侵攻してきたナチ・ドイツに住居を追われました。7歳の時でした。

強制収容所に連行された父母と引き離され、他の家族らとのゲットー（ユダヤ人居住区）暮らし。食事は1日角砂糖3個、押し込められた防空壕はトイレもない不衛生な状態でした。45年1月、旧ソ連軍に解放され、家族と再会しましたが、父親の体重は28キロにまで減っていたといいます。

苦難を語り継ぐ生存者

ツェグレディさんは67年以降、日本の音楽大学でピアノを教えるかたわら、若者らにホロコーストの体験を語り伝えてきました。

イスラエル人が犠牲となった昨年10月のイスラム組織ハマスによる攻撃については「痛切なショックを受けた。犠牲者や家族、全てのユダヤ人と思いを共にしたい」と語ります。

その一方、イスラエルによるガザへの報復攻撃には「自らの意思でもないのに戦闘に巻き込まれたパレスチナの人々、犠牲になった子どもたちとも思いを一つにしている。ガザでの破壊や死は、昔ゲダペストで起きたことと同じだ」として、イスラエル擁護とは一線を画しました。

民間人も犠牲となるガザ攻撃はジェノサイド（民族大量虐殺）を禁じた条約に反するとして国際司法裁判所に提訴され、同裁判所はイスラエルにジェノサイド防止を命じる仮処分を出しました。

条約は第2次世界大戦後、ホロコーストのような暴虐を繰り返さないために制定されました。痛みを負ったイスラエルの人たちがなぜ、極限の状態で苦しむ人々に思いが至らないのでしょうか。

約600万人が犠牲になったホロコーストは、ヒトラーらナチス幹部に限らず、「普通の人々」の同意や黙認も原動力だったことが明らかになっています。

その一方、ドイツでは1万～1万2千人のユダヤ人がナチスによる強制連行から逃れ、地下に潜伏して約5千人が戦後まで生き延びたといいます。背景には2万人を超えるドイツ人の支援があったとみられます。

支援者らをたたえる呼称を書名に付けた「沈黙の勇者たち」（岡典子・筑波大教授著、新潮選書）が詳しく紹介しています。

例えば、ドイツ人女性ニッケルさんは妊娠中の[illegible]かけて支援を申[illegible]食料を分け与え、書の写真を貼り替[illegible]身分証明書に偽造[illegible]を見破ったゲシ[illegible]警察）に証明書[illegible]と主張して放免さ[illegible]きな危険を伴う[illegible]

ここまで尽く[illegible]親切にしてくれた[illegible]えなかったこと[illegible]しの思いからだ[illegible]

ゲシュタポの追[illegible]伏ユダヤ人らは多[illegible]すが、その都度、[illegible]などの支援をして[illegible]らと出会いました[illegible]どを通じてユダヤ[illegible]ワークも出来上が[illegible]

危険を冒し

最大のネット[illegible]カウフマンさん[illegible]がりでした。闇[illegible]

中日新聞 （第3種郵便物認可）

社説

燃えよ、「部活」のように

週のはじめに考える

何をもって春だと感じるかは、人それぞれ。野球ファンでも気の早い人は「プロ球団のキャンプイン」と言うでしょう。「いや、高校野球の選抜大会開幕だ」と考える人も、少し後の「プロ野球公式戦のスタート」を挙げる人もいるはずです。

どれかでなく、その辺りの気分を引っくるめて「球春」という言い方がありますが、この週末には既にセ・パ両リーグでペナントレースも始まったので、ここはもう何はばかることなく「球春到来」と言ってよいでしょう。

「WBC効果」の大きさ

この「球春」という言葉、新聞はかなり前から使っていますが、辞書に載るようになったのは比較的最近のこと。広辞苑なら、2018年改訂の7版でやっと掲載されました。手元の歳時記には見当たりませんが、俳人坪内稔典さんの『季語集』では、春の季語に仲間入りしています。

さて、そのプロ野球ですが、公式戦の総観客動員数は20年、21年と1千万人に達しませんでした。無論、コロナ禍のせいです。ところが22年は倍増以上の2107万人、23年はさらに増えて2500万人超。まだ、コロナ禍前、19年の2653万人には及ばないものの、かなり順調な復活であることは間違いありません。

各球団は今季、さらなる誘客に躍起ですが、オープン戦を見る限り、人気上昇は続く気配があります。ソフトバンクは球団史上最多の観客動員を記録、阪神は1試合で4万人超の観客を集めました。素人考えながら、やはり一番の要因は「あれ」ではないか、と。そう、ワールド・ベースボール・クラシック（WBC）です。

大谷翔平選手ら日本代表が、メジャーの有力選手をそろえた米国などを撃破して世界一になったのは昨年3月。あの時の感動が、ずっと効いていると思うのです。

クラレが発表する小学6年生の「将来就きたい職業」アンケートの結果にもそれはうかがえます。23年も男子の1位は「スポーツ選手」でしたが、内訳では野球（40・3％）がサッカー（25・4％）を大きく上回り3年ぶりのトップに。同社も「サムライたち」の偉業が影響したと分析しています。

「プロらしからぬ」の魅力

では、なぜ、そこまでWBCは人々の心を揺さぶったのか。試合の細かいところはもう覚えていませんが、今も強烈に残っている、ある印象があります。

それは、選手らの熱さ、です。ひたむきさ、懸命さといってもいい。常に全力疾走、好機にはベンチから身を乗り出して大声援を送り、仲間の快打には大騒ぎ、ケガを押して守備につき…。中継を見ながら正直、こう思いました。

これはプロ野球じゃない、「部活」だ―。

「プロならでは」の高い技術やパワーも無論、魅力ですが、逆に「プロらしからぬ」熱さやひたむきさが、さほどプロ野なかった人まで魅了えられないでしょう。

確かにプロのシーで、コンスタントなれます。野球少年のにあった熱さやひたな業」にした瞬間からわれていくものなのん。でも、もしファたいのが「プロらしら「プロ野球」だとしらが球場で「部活」る姿を見せることが策」になるということ。

話が桂馬筋に進む似たことは国会議員に思います。政治を志でも「国民奉仕に身たいな熱い理想、燃いていたはず。まさから「パーティー券裏金をこしらえ、選う」などと考えていは思えません。

ニュースを問う

風化とたたかう〈1〉

豊明事件20年 ④

「忘れない」友や師の決意

加藤 美喜（編集委員）

犠牲者の周りにいた人たちの人生を事件は変えた。

2004年9月に愛知県豊明市で起きた母子4人殺人放火事件で、殺害された長女加藤里奈さん＝当時(13)＝の親友だったYさん(32)はその一人だ。

里奈さんとは中学1年の同じクラスですぐにうち解け、部活動も同じバレーボール部に入った。「あんなに気の合う子はいなかった。毎日、一緒にいるのがとにかく楽しかった」。ディズニーのノートで交換日記を始め、色とりどりのペンで13歳の思いを伝え合った。

事件前の7月、里奈さんは交換日記に「『セカチュウ』よかったねェ！」と興奮気味に書き込んだ。大ヒットしていた映画「世界の中心で、愛をさけぶ」に、2人で「サイコー！」と感動した。好きな男子の話も、いっぱいした。

命を見つめ 看護師に

9月9日の朝。登校すると、自転車置き場に里奈さんの自転車がなかった。いつも先に来ているから、嫌な予感がした。教室に入ると、気を使った同級生たちが「Yちゃんには言わない方がいいよ」と小声で話すのが聞こえた。里奈さんの家が火事になったと知った。それ以降の当時の記憶を、Yさんはあまり語らない。

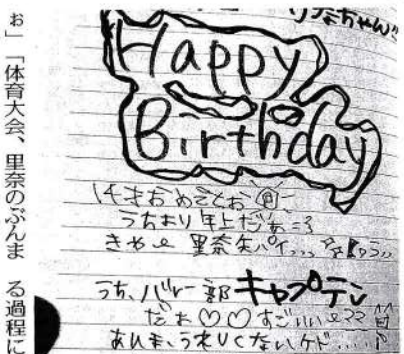
交換日記の右側のページは書かれなくなった。その空白に語りかけるように、1人で思いをつづった。「Happy Birthday 14才おめでとお」「体育大会、里奈のぶんまで頑張るから、見ててね」。頻度は減ったが、卒業後も書き続けた。

大切な友を失い、命について何度も考えるようになった。「人を救う仕事に就きたい」と、高校卒業後に看護専門学校を経て、21歳で看護師になった。

私は当時のYさんに一度、会っている。公立病院で研修中で、救急外来を希望していた。緊急搬送されてくる患者に日々、向き合うハードな職場をあえて志願した彼女に、真っすぐな意志を感じた。

先月、久しぶりにYさんと再会した。結婚して、病院から介護施設に職場を移っていた。新型コロナウイルスの感染が広がり、死に目に家族が面会できない姿を病院で間近に見て、感じるところがあったからという。自身も里奈さんとの別れは突然だった。人生の最後に、一緒にいられる空間をつくってあげたい。残る家族の思いも大切にしたい―。そう考えるようになった。

介護施設では、終末期の入居者の家族に連絡を取り、双方が心の準備をして別れを受け入れる過程に気を配る。家族から「最期に会えてよかった」と言ってもらえて、やりがいを感じた。親友との別れと喪失感、その後の経験のすべてが、今の彼女につながっている。「事件がなかったら看護師になっていなかった。私の人生は全部、里奈のおかげなんです」



Yさんが事件後も里奈さんに書き続けた「交換日記」

空手指導 思いに変化

人を救いたい。Yさんと同じ志を持って警察官になった人は、殺害された次男正悟君＝当時(9)＝の同級生にもいる。影響は当時の子どもだけではない。15歳だった長男佑基さんの空手の師匠・Mさん(54)は、自分が教えてきたものを事件によって根本から揺るがされた。

当日、連絡を受けて崩れ落ちた。「身を守るすべ」を教えてきたのに、命を救えなかった。自分のやってきたことは護身に役立たなかった。「空手をやめよう」とまで思った。

佑基さんは、小学校から続けた空手を一度やめて、中学2年の終わりにふらっと戻ってきた。色帯を持っていたが「もう一度、白帯からやりたい」と、真摯な姿勢で稽古に打ち込んでいた。

事件後、Mさんは捜査員に「悔しい」と告げた。慰めかもしれないが、捜査員は「佑基さんは多分、抵抗したと思う」と返した。中学で陸上部の主将を務めた佑基さんの脚の筋肉は、捜査員が驚くほど鍛え上げられていた。Mさんは「その脚で窓から飛び降りて、逃げてほしかった」と今でも考える。

自分が空手をやめても佑基さんは喜ばないだろう。思い直したMさんは現在も地元で教え続ける。今も「身を守るすべ」を指導しているが、込めた思いは事件前と違う。

佑基さんを襲った暴力は、自身の想定をはるかに超えていた。そうした理不尽な事態は突然、どんな人にでも起こり得る。明確な殺意を持った敵に対抗するのは難しいだろう。それでも一瞬の判断で、体で覚えていることを繰り出せれば、生き延びられるかもしれない。大声を出す。つかまれた手を払って逃げる―。身を守るためのそんな基本を含めて、女性や子どもにも実践で「すぐに役立つこと」を意識して指導している。

里奈さんの親友だったYさんは、今も里奈さんの誕生日に毎年、インスタグラムに花の写真とメッセージを投稿する。友人からすぐに「いいね」の賛同が来る。「皆に里奈を覚えていてほしい。ずっと忘れないで」

犯人は、事件の風化を望んでいるだろう。だがYさんやMさんのように、奪われた命への思いをつないでいく人たちがいる。意志があれば思いはつながる。そう信じて私も伝え続けたい。

豊明母子４人殺人放火事件の情報提供は、愛知県警愛知署特別捜査本部＝電0561（39）0110（代表）＝へ。

中日新聞 （第3種郵便物認可）

社説

海を越えて学ぶ意義

週のはじめに考える

「日本」の国号を公式に使い始めたばかりの717年、吉備真備や阿倍仲麻呂ら557人が4隻の帆船で、難波の港（現・大阪市）から旅立ちました。その半数は船の漕ぎ手。目指すは最大の国際都市、長安（中国西安）でした。

玄宗皇帝が治めた唐の都はシルクロード交易で繁栄。中央アジアのソグド人、ペルシャ人、ムスリム商人のほか、日本、朝鮮半島、ベトナムなどアジア各地から多様な人々が集まっていました。

ほぼ20年に1度、海を渡った留学生の目的は最新の学問と技術、語学を学び、仏教や儒教の経典などを手に入れることでした。

真備は入唐から18年後、儒教全般にわたる典籍や史書を日本に持ち帰ります。さらに天文暦書、楽器、武器などを伝え、朝廷で異例の出世を果たしました。

一方、仲麻呂は勉学に励んで科挙の最難関の進士に合格し、皇帝側近として位階を上ります。盛唐の詩人、李白や王維とも親しく交流しました。しかし、帰国船が難破し、奈良の「御蓋の山」を再び見ることなく、半世紀余りを過ごした唐で亡くなりました。

804年には空海と最澄がともに留学僧として唐に入り、帰国後それぞれ真言宗、天台宗の開祖となったのはご存じの通りです。

国を挙げての留学ブームは日本の歴史上3度あったとされます。遣隋使・遣唐使の後は、江戸の幕末から明治期にかけて欧米に使節・留学生が盛んに派遣されます。第2次大戦後はフルブライト交流をはじめ米国留学が主流になり、日本の復興と科学技術の発展に有為の人材を多数輩出しました。

いずれも日本社会の大きな変革期に当たり、新たな政治・社会制度や先端技術を学ぶ必要に迫られてのことでした。

4度目の留学熱なるか

政府は今、4度目の留学熱を盛り上げようと躍起です。2033年までに年間50万人の留学生を送り出す目標を掲げました。新型コロナ禍前の19年の実績が22万2千人ですか

ら、それを倍増させる野心的な計画といえます。

内訳は学位取得などを目的とする大学生・大学院生らの長期留学が15万人（コロナ禍前は6万2千人）、中・短期の留学23万人（同11万3千人）、高校生の留学・研修12万人（同4万7千人）。

しかし、大きな壁が立ちはだかっています。まずは経済的な問題です。1ドルが152円に迫る34年ぶりの円安は、海外での勉学と生活には大打撃です。奨学金制度の拡充が急務になります。

大学に進学した若者が留学を志そうとするのは3～4年次が中心ですが日本ではインターンシップ（就業体験）や就職活動の時期に当たります。留学生を増やすには企業が採用制度必要があるのか

人類は地球温暖化と食糧・水資源の危機に直面しているう激動の時代だ

ぶ意義があるのさまざまな人社会、価値観に理解が深まれば

でも、国際社会できる問題があ

でしょう。平和る機会にもなり

絶えぬ紛争

コロナ禍は想往来を妨げまし機構の最新の調度の大学生らの

ピーク時（約11余りにとどまり米中対立など暗い影を落とし北京大の賈慶

ニュースを問う

風化とたたかう〈1〉

豊明事件20年 ⑤

期待と落胆 姉「助けて」

加藤 美喜（編集委員）

焼け跡の家の2階寝室で、妹が殺害されていたベッドの上に姉は横たわった。「どんな思いで死んでいったのか。せめて、長く苦しまないで逝ったと思いたい」。そして誓った。「絶対に仇を取ってやるから」

2004年9月に愛知県豊明市で起きた母子4人殺人放火事件で、殺害された加藤利代さん＝当時(38)＝の実姉・天海としさん(61)の脳裏には、殺害現場の家の中に入った時の記憶が鮮明に焼き付いている。

許可を得て中に入ったのは事件から2年後、家が取り壊される直前のことだ。利代さんと長男佑基さん＝同(15)、長女里奈さん＝同(13)、次男正悟君＝同(9)＝の思い出がまだ多く残っていた。家族写真や母子手帳、へその緒まで…。煤だらけの部屋で処分されそうになっていた遺品を持ち帰り、今も手元で大切に保管している。

4歳年下でだった一人の妹の利代さんとは、何でも話せる仲だった。それぞれ年の近い3人の子を産み、互いの家を行き来し合った。結婚した時に「世界一幸せ」と言っていた妹が何者かに、無残に殺された。「体に大きな穴があいたような感覚」が長く続いた。

時効撤廃も逮捕至らず

世間では、時に遺族にも心無い中傷がふりかかる。天海さんは事件後しばらく「姉」として、匿名で取材に応じていた。自身の、まだ10代だった子どもたちを守る必要があったからだ。しかし妹に誓った犯人逮捕のためには、自分が表に出て情報提供を呼びかける活動をしなければならなかった。

そんな時、テレビ局の記者が「活動名」を提案した。別の殺人事件の遺族にも、亡くなった子どもたちの名前を並び替えて活動名にしている人がいると知った。

4人とともに生きる。その思いを込めて「天海としし」に決めた。「天海」は、いつも利代さんの子どもたちから、もう一人の母親同然に「マミー」と呼ばれていたから。「としし」は、利代さんの名前からもらった。

名前を得て力が湧くのを感じた。「いつも利代たちと一緒にいる」。4人の思いを乗せて生きていると実感する。

全国の殺人事件被害者遺族の会「宙の会」に入り、強い絆ができた。東京の世田谷一家殺人事件や上智大生殺人放火事件、名古屋市西区の主婦殺人事件（いずれも未解決）などの遺族とともに殺人事件の時効撤廃を訴え、2010年に法改正を勝ち取った。理不尽さへの社会の共感が大きな「風」となり、国を動かしたのを目の当たりにした。

殺害された4人の写真を前に心境を語る天海としさん

時効はなくなったが、妹に誓った犯人逮捕はかなわないまま、もう20年になる。「必ず捕まえる」「諦めないで」―。そう言いながら、強い気持ちを持って捜査に当たる刑事たちの存在が希望だった。でも一人、また一人と定年で去っていった。そのたびに心から泣いた。

期待と落胆の繰り返しで、気持ちは乱高下した。今も「ゴールの見えないスタートラインに立ったままだ」と感じる。それでも犯人を捕まえられるのは警察しかない。退職や転勤をした後も、毎年4人の命日に手を合わせてくれる刑事たちがいる。宙の会の仲間や、助けてくれる地域の人たちがいる。

無関心防ぐ「想像力」を

今年2月下旬、豊明市の文化会館に天海さんの姿があった。愛知県内でまだ少ない「犯罪被害者等支援条例」の導入を目指す豊明市がNPO法人と主催したシンポジウムで、別の殺人事件の遺族たちとともに体験や思いを語った。

天海さんは「妹たちに代わって、無念の代弁者として『声なき声』を伝えていきたい。犯人検挙を諦めない、強い気持ちを持って向き合う警察の方々の存在が必要です」と、切々と訴えた。「そのためには地域の方の力が、情報が必要です。どうか助けてください」

会場には宙の会の仲間や警察関係者の姿も多くあった。遺族らの思いを聞き、犠牲者たちのスライドを見るうちに、会場からすすり泣きが聞こえた。司会者や刑事たちも泣いていた。その一人は「今日の話を聞いて心が動かなければ、刑事ではない」と言った。

主催者が「被害者に『同情』ではなく『共感』してほしい。わがことと思ってください」と来場者に呼びかけた。その言葉をつなぐように、天海さんは「もしも突然、大切な人が誰かに殺害されてしまったら、あなたならどうしますか」と静かに問いかけた。

この問いへの想像力を持つことが、私たちにできる支援の第一歩だろう。未解決事件の遺族の多くが最も恐れるのは「無関心」だ。一人一人が心に持つ正義感が大きなうねりとなって時効撤廃を実現したように、多くの人の気持ちが合わさって、止まった時計の針を動かしてほしい。

私も犯人逮捕と事件解決を強く願う。見えない犯人像に少しでも迫るため、取材を申し込む手紙を元捜査員たちに書き続けた。

＝第1部終わり

（後日、第2部を掲載します）

豊明母子4人殺人放火事件の情報提供は、愛知県警愛知署特別捜査本部＝電0561(39)0110（代表）＝へ。